

ミドルヤードへの協力

清 邦彦



ミドルヤード講座室4を見学する来館者

ふじのくに地球環境史ミュージアムは、展示・教育など一般来館者を対象としたフロントヤードと、研究室や収蔵庫のある非公開のバックヤードとに分かれています。この二つの間にあるのがミドルヤードです。ここでは標本の作製、標本の登録作業などバックヤードで行っていることを来館者が見られるようになってきました。

第2講座室では骨格標本の作製、2階の第3講座室は植物の標本作成、第4講座室では昆虫標本の作成や整理が、研究員やNPOスタッフによって行われています。本ミュージアムの特徴は、その様子を、ガラス越しではなく、一緒に室内に入って直接対話しながら見られるところにあります。

私のかかっている第4講座室“昆虫ラボ”では、ライトトラップ用の白い布が張られ、窓際には色とりどりの補虫網が並べられています。採集の仕方や標本のつくり方の説明と用具、来館者に人気のあるきれいな蝶や大型のセミなどの昆虫標本、各種の昆虫図鑑、時には生きた昆虫なども展示されています。また、小さな昆虫を観察するための双眼実体顕微鏡などは子ども達にアカデミックな雰囲気を与えています。

来館者がまず発するのが、「これ、本物？」という言葉です。「本物を標本にするのですか？」。時にはケージの中でバタバタしているチョウにも「このチョウチョ、本物？」と聞いてきます。「本物でないのは標本とは呼ばず模型と言います」などと答えているのですが、そんなことから、現代の生活がどれだけ本物と接していないのか、考えさせられました。空気や明るさまで管理された部屋の中で暮らし、目にする自然は画像の中ばかり。唯一本物の自然であるゴキブリに大騒ぎです。

昆虫標本に対する反応が世代によって違うのも



講座室4で標本整理をする様子

興味深いです。年配の方は女性でも、「昔、採って標本にしたよね」などと懐かしそうです。それ以降の、『標本にしたら虫がかわいそう』という教育の中で育った世代の方は、昆虫に優しいどころか、小声で「昆虫だって…」と言いながら部屋に入らずに通過されたり、時には入った途端「キャッ」と叫ぶ方もいらっしゃいます。その点、小さな子どもは先入観なく、昆虫に興味を持ってくれます。

採集の仕方や標本の作り方と同時に、ラベルを付けること、標本を作ったり保存する必要性、時には必要以上の採集は慎まなければいけないことなど話しています。

じつはこのミドルヤード、標本のつくり方以上に大切なと感じるのが、来館者との生の対話です。「こんな虫がいたけど、何でしょう？」「渡りをするチョウってどれですか？」これまで静岡県内で、こういう話のできる場所があったでしょうか。自然に関心のある県民の受け皿になる場所があったでしょうか。そんな話をしたくてくり返し来館する大人も子どもも見受けられるようになりました。私が特に期待するのが子ども達のことです。今の学校の中では、虫や野鳥や化石や草花などの好きな子ども達が、そのことを教師や友達と話題にすることがなくなってきました。そんな子ども達が自分の好きなことを思いっきり話せる場が必要なのです。

県民の自然に関する相談の窓口となりつつある重要なミドルヤードですが、今のところNPOスタッフのボランティア協力に依るところが多いのが現状です。ミドルヤードが開いている日時は不規則で、特に来館者の多い土日の対応が十分できないことが課題だと思えます。